

養育環境が20代のキャリア形成を困難にする 事例のインタビュー研究：サルトルの対自 論に基づいた質的考察

遠藤, 野ゆり / ENDO, Noyuri

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2013-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009123>

養育環境が20代のキャリア形成を 困難にする事例のインタビュー研究 —サルトルの対自論に基づいた質的考察—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 遠藤 野ゆり

1 はじめに 先行研究と問題の所在

(1) 先行研究の検討

①養育環境とキャリア形成に関する研究

養育環境が子どものキャリア形成に与える影響の大きさは、様々な観点から指摘されている。養育された家庭における対話の方法や文化など、経済面以外に受け継ぐことになる文化資本が、社会に出ていくキャリア形成に大きな影響を与えることは、既に1970年代に社会学者のブルデューによって指摘されている¹⁾。また、こうした伝統的な社会学の流れを引き継ぎつつも、階層社会のヨーロッパとは異なり一億総中流と呼ばれたこともある日本社会では、近年、社会階層の流動性に関し、養育家庭の経済的な問題が大きく絡んでいることが改めて指摘されている。すなわち、家庭の経済力と子どもの学力の相関が高いことが、様々な調査から指摘されている²⁾。また、児童福祉の観点からは、虐待の世代間連鎖など、養育家庭の環境が、おとなになってから新たに築く家庭環境に類似することが指摘されている³⁾。このように、現代社会の大きな問題を紐解いてみると、その背後には、貧困、虐待といった、家庭の負の資本と深い関係をもつものが多いことがわかる。

②豊かな資本を有する家庭における問題の研究

他方、富裕な家庭における問題、過保護家庭における問題など、一見すると豊かな資本が背後に

控えている問題も見逃せない。「金持ちのドラ息子」といった言葉があるように、あるいは古くは聖書に有名な「放蕩息子」の逸話があるように、家庭の富裕さが子どもの豊かな育ちを保障しないことは、言うまでもないことである。

その中でも、医学や教育において問題になることの一つに、過保護家庭で育った女兒に見られる摂食障害がある。家族療法の領域では、神経性無食欲症の両親の態度が過保護である、といった指摘がしばしば見られる。例えば井上・山内は、結婚後に神経性無食欲症を発症したある患者について、「社会的に地位があり、子どもの要求・欲求を即座に満たそうとする甘い」父親と、「子どもと感情的に密着していた」母親との間で育った患者が、「過保護・過干渉のために」この症状を患ったこと、結婚した夫は「放任のために、患者に対して程よい距離で見守れないことが、症状を遷延させていた原因の一つである」ことを明らかにしている⁴⁾。他方で山形・日高は、摂食障害傾向における強迫性と両親の養育態度を調査した結果、「養育態度の違いに与える要因として、摂食障害傾向よりも強迫性との関連が強い」⁵⁾ことを指摘する。そのうえで先行研究もふまえ、「強迫性が高い摂食障害の両親の養育態度の特徴に関して、母親の過保護な養育態度が特徴的であると推察される」⁶⁾、と結論づけている。このように、摂食障害に関して明確な結論は出ていないものの、そこに親の養育態度が何らかの影響を与えていると

考える専門家は多い。

親の養育態度と関連づけられる問題は、上述のような摂食障害に関するものが目立つものの、他にも適応障害⁷⁾、非行⁸⁾、親子関係や自尊感情の阻害⁹⁾など、様々である。そしてこうした先行研究から推測されるのは、そもそも医療や教育において明確に問題とならない形であっても、親の養育態度が子どもの育ちに与える影響は多大である、ということである。

(2) 本稿の課題

しかしながら、富裕な家庭における保護的な養育態度が、医療や教育の明確な問題を呈さない場合に、具体的にどのような仕方で子どもの育ちに影響を与えているのか、その時当の子ども自身はどのような体験をしているのかは、これまで十分に明らかにされてきていない。というのも、こうした問題は、親や子どもたち当事者には、不調など表面化している問題は明らかになるとしても、その背後に潜んでいる問題を語ることは難しいからである。あるいは、そもそも医療や教育において明確な問題となっていないケースでは、不調さえ、本人には十分認識できないものだからである。

今日、広く指摘される問題の中に、大学を卒業し、年齢的には社会的自立を遂げるはずの若者のうちには、早期離職や家族内の過度な依存関係など、年齢にふさわしい自立を果たせない者がいる、ということがある。こうした問題において厄介なのは、しばしば本人には、その状況が「問題」と認識できないことである。ここで推測されるのは、その認識の難しさそのものが、自立できないことと密接に絡んでいる、ということである。

そこで本稿では、過保護家庭で育ち、周囲には自立できないことを心配されつつも、本人は心配されること自体を嫌がる、ある 20代女性へのインタビューをとおり、過保護な環境が 20代のキャリア形成に与える影響を、特に自立を妨げる形で働く影響を、明らかにしたい。その際に、未来に向かって現在の自分自身を超え出していくという仕方で生きる意識の在りように関するサルトルの対

自論に即して解明をしたい。

2 事例の概要と問題点

(1) 事例の概要

本稿では、キャリア形成に関し、家庭環境がその要因と推察されるある困難を抱えながらも、本人自身は問題意識を明確に抱いていない、前田さん（仮名・女性）のインタビューを検討したい。インタビューは、「家族関係について」というテーマで依頼し、約 2 時間半、非構造化面接の形で行った。インタビュー内容は、前田さんの許可を受けて、ビデオに録画し、その後、テープ起こし原稿ならびに映像を見ながら、前田さんの体験を考察した。

前田さんは、実家から遠隔地にある国立大学の教育学系の学部で一人暮らしをしながら四年間まなび、卒業後に地元に戻って公務員になった、インタビュー当時 23 歳の女性である。おっとりとした性格は、友人から「天然キャラ」と指摘されるが、現役での国立大学入学や公務員試験の合格など、進路においては順当な道を歩んでいる、ともいえる。その前田さんに対する周囲のもう一つの評価が、「親が過保護」というものであり、これは大学在学中も、また就職した後も同じである、という。

前田さん自身、親元で暮らしていた子ども時代は、両親に甘えながらも一方でわだかまりを覚えていたという。大学時代に親元を離れたことで、そのわだかまりを強く自覚した前田さんは、卒業研究のテーマに、家族を選んだ。両親と兄にインタビューしたこの研究をとおり、家族という関係の難しさや、そこから自立していく意味を考え、前田さんであったが、最終的には、地元に戻って就職することにした。前田さんの帰郷を両親は喜び、前田さん用の車を買ったり、部屋をととのえておいてくれたという。親から自立するためには一人暮らしをした方が良く、という周囲の勧めもあったが、経済的な面で自立するのが難しいという判断から、前田さんは実家に戻る事となった。

このように前田さんは、「過保護」といった周囲からの指摘を、半ば受け入れ自覚しながらも、その境遇を抜け出そうとはしない。前田さん自身、親が「面倒くさい」と思うことはあるものの、特に問題は感じていないという。にもかかわらず、将来自立できるかわからないことを思うと、とても不安になる、ともいう。

(2) 養育環境

まず、前田さんの養育環境が窺われる彼女の語りを取りあげたい。

社会人で、飲み会があって、お迎えを頼まないといけないとなると、10時とか10時半とかには電話がかかってきて、「どこに迎えに行けばいい？」と。

社会人になってもいまだに、飲み会などで帰宅が遅くなると、まだ飲み会が終わってなくても、前田さんの両親は何度もメールを送ってきて、迎えにくるという。こうした保護的行為は、さらに家庭内での会話の持ち方にも及んでいる。

なんでしょう、〔その日の予定を〕報告する癖がついてるというか、報告しないといけない雰囲気。親がすごく気にするんですよ、今日は飲み会があるの、ないのって。

自分の部屋にいられない。自分の部屋にいます、今何してるのってわざわざ来るので。
〔それは普段から？〕¹⁰⁾

はい。何してるのとか、何してたの、とかすごく気にしてくるので、だったらもうリビングにしようかなと。

親の養育行為や態度は、前田さんにはこのように語られている。また、その他インタビューで語られたことや、前田さんが取り組んだ卒業論文などからは、次のようなことがわかっている。すなわち、前田さんの母親は、幼少期から絵本の読み

聞かせなど、子どものためにたくさんの時間を費やし、働き始めても食事や掃除を完璧にこなしていた。また、親が中学受験を望んでいると感じた前田さんが、「受験してもいいよ」、と言ったその日のうちに、進学塾への入塾手続きがとられていた。前田さんがダイエットしていると、頃あいを見計らって母親はお菓子を買ってきて、「そろそろ食べなくなった頃でしょう」と言った。このように前田さんの養育環境は、まさにかゆい所に手が届く、いたれりつくせりのものである。

しかし本稿で注目したいのは、そうした養育行為に対し、前田さん自身がどのような態度を取っているか、である。そこで次に、この点に関して、彼女の抱えている問題点を浮かび上がらせたい。

(3) 本人の認識

前田さんは、周囲からも勧められるという「一人暮らし」について、次のように語る。

お金がないことを考えると、親元で暮らした方がいいのかなって。でも、今すごく一人暮らしをしたいと思って、親の、あ、親に毎月2万円払ってるんですけど、〔略〕親からお金をすごく請求されるようになって、それはすごく嫌だと思って、それを脱するために一人暮らししたいなって思ってます。

前田さん自身は一人暮らしを希望している。しかしながら、結局は一人暮らしをしていないのであり、その理由を、次のように語る。

〔転職するか、お給料が少しずつ上がるのを待つか、貧乏生活を覚悟して家を出るか、だよねえ。〕

あー…（しばらく考える）貧乏生活（体を倒して首を振る）…。周りにそういう〔＝一人暮らしをしている〕人がなくて、実家っていう人が多くて、みんな実家で、ちょっとどうかなって思う人もやっぱりいるんですけど、みんな、親に頼るのが当たり前っていう人が

多くて、そしたらわざわざ苦労して一人暮らしすることもないかなって思ったりします。

つまり、周囲に比べれば前田さんの家庭環境は過保護とはいえないのであり、だからこそ一人暮らしをする必要性はない、というのである。同じようなことを、前田さんは別の話題でも語る。

うちの親は、よそと比べたら、よそはよそなんですけど、よそから見たらうちが過保護なのかもしれないですけど、お迎えに来るのとかはそんなに過保護じゃないと思ってて、過保護な家庭はもっと過保護だし。

こうした語りに一貫して見られるのは、前田さんの養育環境が「過保護」であるということに対する彼女自身の頑なな否認である。さらにいえば、何らかの具体的行動に出て現状を打破することが求められるほど問題ある環境にいるのではない、という前田さんの思いがここには現われているだろう。そしてこうした思いが出てくるのは、「過保護ではないか」という周囲の指摘があるからこそ、と考えられる。実際前田さんは、次のようにも語る。

みんなが私のこと「過保護」って思わなくなればいいと思います。〔飲み会の途中で親から頻繁に届く〕メールは、メールはいいんですけど、何回も親から「今どこ？何時に終わるの？」ってメールが来ると、周りが、あー…みたいな。「また親からメール？」って（苦笑）〔略〕会社の人も「過保護」って言うんで…。そう言われるのが嫌ですね。

このように前田さんにとって問題は、彼女の養育環境を「過保護」とみなす周囲のまなざしであって、彼女の養育環境そのものでも、あるいは彼女の現在おかれている状況でもない。

親の養育態度が行きすぎであるかどうかは、当事者にしかわからない点も多く、本稿では問題と

しない。問題となるのは、親との関係そのものによって前田さん自身が感じている、不安全感の強くしかし漠然とした将来不安である。前田さん自身は、次のように語る。

〔過保護だとは思わないけど、不安なの？〕
そうなんです…不安…。このままじゃやばいって思います。
〔どう不安なの？〕
親に頼って、家にいて、独身で、貯金もなく、死んでいくのかもしれない…〔略〕

こうした語りからすると、前田さん自身が現状には問題意識を抱えていることになる。にもかかわらず、一人暮らしをする、貯金をするといった自立のための、すなわち彼女の抱えている不安解消のための行為を実現することを、前田さんは頑なに拒否する。そして、周囲からのまなざしの方を否定する。そうしたふるまいが何ら現状を改善してくれるわけではないにもかかわらず、なぜ前田さんはそのようにふるまわざるを得ないのだろうか。

3 不満という形の受動的攻撃

上の問いを明らかにするために、まず、前田さんが抱えている不安全感、不安や不満といった、前田さんの中にあるネガティブな思いを確認しておきたい。

(1) 前田さんの語る不満

彼女が語る一つ目のネガティブな思いは、2－(3)で述べたように、周囲のまなざしに対する不満である。また二つ目は、将来への不安である。さらに彼女は、自分の家族たちに対して、次のような不安や不満感を述べる。

①母親に対する不満

私が帰るまで、親は寝ずに待ってるんですよ、「先に寝てていいのにー」って言うんですけど

ど、「ううん、心配だから起きてる」って言われて…。めんどくさって（苦笑）。

〔親が怒るのは面倒くさいの？〕

面倒くさい。一度怒りだすと、聞いているこっちもイライラするし、ムダなエネルギーを使っている感じがすごくする（苦笑）、はいって聞き流しつつも、ずーっとうるさい。

〔ダイエット中にお菓子を〕買ってこないでって言ったじゃんって言っても、「私はあなたのために思ってしてるのに」って言われて、私が思いやりのない悪い子、みたいに言われます。

〔親は本当にそう思ってるのかな？〕

あなたのためにとって？うーん…でも、私の気持ちとか希望とかに沿ってなくて、親のつごうっていうか、親の考えで動いている感じなので、…あんまり…沿ってないです。

〔親は罪悪感があったのかな？〕

ああ、あったみたいです。最近になって、あの時私太ってすごくイヤだったよって言ったら、「あの時はお兄ちゃんもいないしかわいそうと思って、毎日お金置いてたよ」って。えーって。それは違うなって。

〔違うって？〕

かわいそうって、私のこと考えてないじゃないですか。なんか違うと思って。

〔「お母さんありがとう」とは思わない？〕

思わない。私のために思ってやってくれたことかもしれないけど、私のためになってないし。

〔「お母さんは私のために思ってやってくれたかもしれないけど、的が外れてるじゃん」とは言わなかったの？〕

あー、言いました。「太ってイヤだったんだ」って。

〔そしたら？〕

「そうねえ」って。流す感じ。

〔略〕

〔卒論で、親が考えてくれてたことが的外れてた、みたいなことを書いていたけど、それはその後、親と話したの？〕

話したんですけど、向こうが本当に受けとめているのかわからないというか、「そうねえ」、とか。流す感じで。なんか、不完全燃焼というか。

②父親に対する不満

ちょうど四月から母親が入院してて、それで家のことを全部やらなくちゃいけなくなったんですけど、父親に対してストレスがたまってきた、何にもしてくれない、とか、すごく。

〔略〕私はこの頃思ったんですけど、どうやら私は親のために何かするのが嫌いで、「親のために何かをしてあげるなんて意味がわからない」ってすごく思ってた、いつも、「どうして私がこんなことをしてあげなくてはならないんだ」って思う時に、「親は私に何もしてくれなかった」、って思ってしまった、「親にしてあげても、私に何も無い」って、すごく思っちゃいます。〔略〕

〔じゃあ親に何をしてもらったら嬉しいの？〕
今してほしいんじゃないって、昔してもらってないというか、ほっとかれたっていう思いがすごくして。〔略〕

③兄に対する不満

兄みたいには絶対なりたくないです。

〔でもお兄さんは親から自立して距離も取って、きちんと稼いで、幸せそうじゃないの？〕
えー…たしかに、お給料とか、〇十万とかいいけど、でも全部、自分のために使えないっていうか、家賃とかそういうのでほとんどなくなっちゃうみたいで。全然幸せそうじゃない。…（首を振って）貧乏とか、ありえない。

④不満足感の整理

このように見てくると、前田さんは、保護的行為を多く実現する親に対しても、そのような親からの過保護的態度を嫌って15歳から親元を離れたという兄に対しても、ネガティブな感情を抱いている。しかもこうした感情は、常日ごろは隠されており、相手に向かってぶつけられることはない。

同様のことは、前田さんの家庭環境に疑問を投げかける周囲に対してもいえる。2 - (3) で述べたように前田さんは、周囲の評価を否定し、それよりも周囲の養育環境の方がより保護的であると非難する。一見すると穏やかな性格で、いわゆる「天然」と呼ばれる前田さんであるが、その語りにじっくり耳を傾けると、彼女に潜んでいる強いネガティブな思いが見えてくるのである。彼女の普段の印象とは矛盾するこうした思いは、なぜこのような形で生じるのだろうか。次にこの点を、精神医学における「受動的攻撃」の概念から捉えてみたい。

(2) 受動的攻撃

精神科医の片田は、「ヴェールで蔽い隠され巧妙に偽装されて怒りが表出される」といった、「怒りをこそこそと表出するやり方」を、精神医学では「受動的攻撃 (passive aggression)」と呼ぶ、と指摘する (p.102)¹¹⁾。受動的攻撃をする人は、「敵意や怒りも否認して隠したまま」に、「日常の社会的・職業的課題に消極的、時には不向きであるようなふりをして、責任逃れをしたり、他人を支配したり、罰を加えたりすることをひそかにたくらんでいるように見える」 (p.103)。

片田によれば、「表面上は激しさを隠した受動的攻撃の根底には、じつは強い怒りが潜んでいることが多い」のであり、その怒りは「満たされない『依存』欲求」 (p.140) と、「依存し過ぎることによっても自分が脅かされるように感じる」 (p.141) ことの両方に由来することがしばしばある。なぜならばこうした人は、「依存することによって、自らの弱さを思い知らされると同時に、

無力感にさいなまれるから」 (p.142) なのである。

片田のこうした指摘を前田さんにあてはめると、彼女の状況は、親に依存し甘えたいという思いと、親に現に経済的にも生活上も依存しなければならないという拭いがたい状況への怒りの両方が潜んでいる、といえることになる。事実、前田さんが不安に思うのは、このまま「親に頼って、家にいて、独身で、貯金もなく、死んでいくのかもしれない…」ということであり、一方で不満足に思うのは、『親は私に何もしてくれなかった』、って思ってしまった、『親にしてあげても、私に何も無い』って、すごく思っちゃいます」という言葉で表わされることなのである。

すると、前田さんの状況は、受動的攻撃という概念で説明可能である、ともいえる。片田によれば、受動的攻撃をする人が「怒りを直接出せない」理由は、「他の人から見たイメージが悪くなる、つまり『温厚な人』『優しい人』といった評判を維持できなくなることへの恐れ、あるいは復讐されることへの恐れなどがあるから」 (p.182) だという。そして前田さんは、会社では人当たり良く過ごし、家で親に反抗するのは面倒くさい、と語るのであり、この点でもあてはまるといえる。

こうした解釈に従うと、次のように語る前田さんの思いに、次のように理解できる。

「迎えに来てもらわないで自分で帰ればいいんじゃないの？」

そうなんです、送ってもらうからいい、とか言うんですけど、うち、お風呂が深夜電力で1時から沸かすみたいな料金で、だから12時までに帰ってこないとお風呂に入れないでしょって。だから帰っておいでって。

「[遅くなるかどうか] わかんないって答えれば？」

「わかんない、決まってるーい」って (笑)。うーん。[略] なんか、後々面倒というか。「寝ずに待ってたのに」とか、「心配して待ってたのに」とか言われるし。「ちゃんと連絡し

てよ」っていう感じになるので、もう先に言っておこうかなと。

「ごめんごめん」って言って流すのを何度も繰り返して、そのうち親も諦めるだろうってはないの?」

諦める前に切れると思います。「…また?」っていう感じじゃなくて、「いいかげんにしてよ」ってバーッて言われる感じで。そうやって面倒くさい感じになるよりは、最初からやった方がいいかなと。

親に社会人扱いしてほしいっていう思いはあるんだけど…過保護って…メリットはあるし、なんか、あんまり困ってもないんだけど、飲み会のお迎えも、ある意味便利…でもメールをしてくるのはイヤなんです。〔略〕その場では言わないんですけど、あとで母親と二人になった時に、「パパも、あんまり遅くまで外で遊んでいるのはいいと思ってないよ」って言われると、何も言わなくてもそう思ってるのかなって。〔略〕パパもパパでそう思ってるんだろうなと思うし、「ママはどう思ってるの?」って聞くと、「ママはどっちでもいいと思うよ」って言うんですけど(苦笑)、思ったら言わないだろうって思って。〔略〕どこかで自分が変わらないと、と思うんですけど、時間がこう流れていってたら、それは変わりたいっていうか、劇的な変化をするぐらいなら我慢しておこうっていうか。〔略〕怖い…。誰かが言ってくれた道しか歩いてこなかったから。誰かがいいよって言ってくれた方ばかり。〔略〕ほんとですよねえ(苦笑)変わらなきゃって思ってる部分はあるんですけど、まだいいだろうって。

上の三つの語りにあるように、前田さんは、今後何をして状況が変わらないであろうと既に諦めている。そしてそう語りながら、例えば親からの迎えを拒否できない理由を、電気料金のせいといった瑣末な事柄に帰す。彼女のこうした諦めの

理由は、受動的攻撃の観点から理解すれば、周囲からの評判を落としたいくない、という前田さんの、いわば打算にあるということになる。

(3) 受動的攻撃論における課題

しかしながら、「受動的攻撃を繰り返す人は、薄目を開けて、自分のやっていることが他人にどんな影響を及ぼしているのかを見ていること」が多く(p.119)、「確信犯的なおいがすることも少なくない」(p.131)という片田の指摘ののけると、もしも前田さんが受動的攻撃をしているならば、確信犯的に行っている、ということになる。たしかに、自らが自立できない状況に不満を語りながらも、その原因を自分自身に帰さないどころか、瑣末な事柄をあげては自立を拒むやり方は、確信犯的ととれなくもない。また、親から自立するにせよしないにせよ、前田さんは家族と、友人や同僚といった周囲から、反対の評価を受けとることになり、両者から高い評価を得ることはできない。すなわち、評判を落とさずに前田さんがふるまうためには、受動的攻撃をするしか方法がない、ともいえる。とはいえ、たとえ親や同僚に知られることがないとはいえ、インタビューにおいてこうしたネガティブな思いを素直に吐露する前田さんのふるまいが、打算的である、とはいい難いことも事実である。また、攻撃、と呼ぶには前田さんの行いは、その結果が周囲に与える影響はあまりにも小さいともいえる。そして何よりも、自ら行動することを諦め、不満をもちながらも現状を受け入れざるをえない前田さんの無気力さや、その無力感を周囲に訴えて周囲を動かそうとすることのない彼女のふるまい方からは、たとえそれが精神医学的に受動的攻撃と呼ぶに値するもののだとしても、彼女がそうせざるをえない理由は、周囲からの評判の維持とは異なるところにある、と考えられるのである。

そこで最後に、前田さんはなぜこのように、諦めることしかできないのかを、サルトルの対自論に即して考えたい。そしてこの考察は、私たちが進路を選択しキャリアを形成する根幹にかかわる

ものである、といえるはずである。

4 対自としてのキャリア形成

(1) サルトルにおける自己と欠如

サルトルは、人間はいつも自分自身に対して何らかの思いを抱いている、という意識の構造から、人間の意識を、「対自 (pour-soi)」と呼ぶ¹²⁾。さて、人間は、すなわち対自は、なぜ行為をするのだろうか。それは、行為によって実現されるはずの自分自身ではいまだ在らぬからである。例えば水を飲むのは喉の渇きをうるおすためであり、喉の渇きをうるおされた自分自身では今はまだ在らぬからである。このように、ある行為によって実現されることになる未来の自己自身に対して、私たちは常に、何らかの欠如を備えている。そして、同語反復的になるが、欠如を備えた存在であるがゆえに、行為を実現すれば成るはずの自己自身になろうとして、行為していることになる。サルトルは、こうした「自己で在らぬ」がゆえに行為するという人間の意識の在り方を、三日月の比喻によって明らかにしている。

人間が、細長い弧を描く月を、「三日月」と、すなわち、「あと十二夜で満月になるはずのもの」と判断しうるのは、月は満月になりうることを知っているからである。三日月を三日月として捉えるためには、十二夜後へと「向かって、この所与を」、すなわち今見えている三日月の形を「超出し [= 別のところへと超え出ていか] なければならぬ」(p.129, [] 内引用者)。人間が満月へと超出しない限り、三日月は、「それ自体においては、完全でも不完全でもなく、他の諸存在との関係さえもなく、それがあるところのものそのもので端的にある」(p.129) だけでしかない。こうした比喻と同様に、人間は、行為を実現すれば成るはずという意味で、理想的で完全な「自己」との関係においてしか、自分を、何らかの欠如分を備えているものとして捉えられえない。

人間が何かをしようと望む時には、その何かをすることによって実現されるはずの自分は、「欠

如を受動的に備えているもの (manqué)」であり、理想的な自己自身ではなく不完全な今の自分は、何かになることによって実現される在り方に対して不足している部分を、すなわち「欠けているところのもの (ce qui manque)」を回復しようとする試みのうちに、その何かになろうとするのである (p.129)。

(2) 未来への自己投企

この欠如論から考えると、私たちは本来、自分自身に何らかの欠如を感じており、日々の行動は、その欠如を埋めあわせるために行われる、といえることになる。空腹を感じるから食事をするのであり、より良い学校生活を送りたいから中学受験をするのであり、今の自分は理想的な姿でないから努力をするのである。

しかしながら、前田さんの育ってきた環境では、彼女は欠如を感じる前に、その欠如分を満たされる。絵本の読み聞かせも、中学受験も、その準備のための通塾も、前田さんが欲する前に、最善の状態で親から提供されている。ダイエット中にお菓子を買ってくるエピソードでは、母親のこの働きかけによって、自分がもうお菓子を我慢できないことを、知らされることになる。

このように前田さんは、自分自身の欠如のほとんどを、自分で発見するのではなく、周囲から発見されている。すると彼女は、自分の欠如分を自覚する間もなく先に指摘され満たされ、それが欠如分であったと実感することもなく過ごしてきた、と想像される。だからこそ、昔も今も、何が欠如しているのか、具体的には彼女にはわからないのではないだろうか。これこそが、彼女自身が、自分の親は過保護ではない、と主張する理由ではないだろうか。

たしかに、欠如が常に満たされるということは、ある意味では良いことのようにも思われる。しかしながら、事実として彼女は、いつも漠然とした不全感や強い不安を抱えている。それはおそらく、彼女の欠如分はいつも、親によって勝手に推測され、勝手に埋められてきたからだろう。つまりそ

の欠如分は、彼女自身の欲求から生じるという意味での本来の欠如分ではないからだろう。

前田さんが語るように、「親のつごう」によるものであるから、事実として、親の配慮はしばしば的を外すことになる。そのような行き違いは、彼女に、たとえば親のせいで太った、といった具体的な不満を生む。しかし問題は、的を外しているかどうかではない。的確な満たし方であっても、彼女には不全感が残っている。というのも、おそらく私たちが日々感じている不足分は、自分自身によって乗り越えられることを必要としているからであろう。

サルトルは、あるべき自己へと向かって、欠如分を備えた現在の自分自身を抜け出ていく仕方を、「自己超出 (soi-dépassement)」と呼ぶ。私たちはいつも、未来へと向かって現在の自分自身を投企 (pro-jet) する。この投企こそが、私たちを未来へと指し向けることになる。すなわち、未来へと向かって生き生き動くことになるのである。サルトルによれば、私たちはこのように、自己を未来へと投げかけるという仕方、「自己を時間化する (se temporaliser)」(p.196) 存在なのである。他方、物理的には時間が流れていても、どうせ何も変わらないと諦めている時、人は現状に、すなわち現在自分の置かれている状況に停滞していることになる。この時、その人には、自らの時間を未来へと超え出ていくダイナミズムが失われてしまっており、傍目にも、「うじうじとした」、「無気力な」印象になる。

身近な例に戻れば、自分自身の欠如分を自分自身で満たすために働きかけるその行為は、時には困難が伴い、時には失敗さえするが、その際には、まだ到達していない未来へと自己自身を超出していくことに伴う、生き生きとした生のダイナミズムが生じる。実感としては、いわゆる充実感や達成感が生じる。もちろん多くの行為は、そのようなダイナミズムを一つひとつ実感できるものではない。空腹を満たすために食事をして、やり遂げた、という充実感はなかなか実感できない。しかしそうであっても、無意識のレベルでは、単に

不足分を満たされるだけでなく、満足感や達成感がもたらされ、時には、つらかったけれどもがんばって良かった、といった実感を伴うこともある。

母親にどれほどの確に自分の欠如分を満たされても、そこには、こうした充実感や達成感はない。そうであるかぎり、親がどれほど配慮したとしても、前田さんにとって「親は私に何もしてくれなかった」のは、わがままではなく、まちがいのない真実なのである。

このように考えると、彼女が、送り迎えしてもらうことをやめたり、あるいはそもそも親元から自立することを、婉曲的に、けれど頑なに拒否せざるをえない理由も見えてくる。筆者にとって、親元で暮らすか自立するかは、干渉を受け入れて経済的な不足を回避するか、経済的な不足を受け入れて干渉を回避するかの二択に思われた。だからこそ、「転職するか、お給料が少しずつ上がるのを待つか、貧乏生活を覚悟して家を出るか」と尋ねた。しかし、これまでの考察に従えば、前田さんの現在の生活において不足しているものを、彼女自身は感じられないことになる。欠如分が感じられない以上、あえて経済的な不足を選択する意味がないのである。

(3) 自己超出の難しさと現在への固執

もちろん前田さんなりに不満足感を捉え、親に訴えたこともある。ところが、母親の対応は、前田さんが自らその不満を乗り越えるように、ではなく、欠如分をもう感じないようにと指し向けていく。たとえば、お菓子を買ってきた母親を責めると、『私はあなたのために思っているのに』って言われて、私が思いやりのない悪い子にされてしまう。つらかったことを伝えても、「そうなんだ」と受け流される。母親の無理解に不満を言うにも、父親が前田さんの遅い帰宅を快く思っていないと伝える一方で、『ママはどう思ってるの?』って聞くと、『ママはどっちでもいいと思うよ』って言う。このように理解ある母親には、不満足な点を詳らかにしてぶつけることができない。つまり、前田さんに何らかの不満足感が生じ

た責任を母親がひき受けてくれないまま、前田さんはとり残されてしまうことになる。

サルトルによれば、私たちが、なりたい未来の自己へと現在の自分を超越出るべく行為する時、実際には、その行為に関わる諸事物に、またその諸事物を含みこんだ世界にと働きかけることになる。働きかけることによって私たちは世界をいわば通過するのであり、サルトルはそれゆえ、世界とは、自己を実現するために「通過されるかぎりにおける存在の全体性のこと」(p.146)である、という。そして重要なことは、例えば喉の渇きを潤すために手にせねばならない水やコップなどは、それを乗り越えねば渇きを潤された自分になれない、というように乗り越えられるべきものとなっている、ということである。このように、「本来世界は、必然的な障碍性 (obstacle) ゆえに、この障碍性のかたで、《それで在るべきである》という形式のもと、私がそれであるところのものとしての自己を見出す…かぎりにおいて、私のものである」(p.149)。つまり、自分がそうあるべきだからこそそうになりたい、という思いをもちながら働きかける時に初めて、世界は私のものとなる、というのである。

すると、なりたい自分になるべく働きかける術を奪われてしまっている前田さんにとって、世界はいつまでも、自分のものとはならないことになる。世界はいつまでも、彼女自身の働きかけを受けることのない超然としたものに留まっており、彼女は、世界を、自ら変えうるものとして経験することができない。

そこが自分で働きかけうる自分の世界ではないのだから、自分の欠如は世界内の諸事物に働きかける自分の努力で満たされうる、という実感や希望は、前田さんには体験されない。それゆえ、自分自身の欠如がなんであるかを捉えにくい彼女にとって、欠如分を乗り越えたいという意欲や構えそのものが、生じえなくなってしまう。すなわち、彼女は、未来へと向かって自己投企する、という在り方になれないまま、慣れ親しまれた現在に留まらざるをえなくなってくる。そして、自分

自身のものではない世界において、ただそこにいる、ということしか前田さんにはできないことになる。彼女の全身から伝わってくる受動性、精神医学的には受動的攻撃ともいえるような受動性は、おそらく、彼女にとって世界がいつまでも彼女自身のものにならないがゆえに必然的に生じている、と考えられる。

ましてや、不全能が残るとはいえ、前田さんにはさまざまなものが親から提供されている。自動車、住居、経済面での支援。こうした支援は、失う怖さを容易に想像できる。前田さんは、いわばどんなムチ、どんな不全能をこうむろうとも、アメにすがらざるをえなくなってしまう。前田さんには、不全能を抱えながらも、現状を諦めて受け流し、いまの生活で与えられる経済面や生活面でのメリットを最大限利用するしか、術がない。

筆者には釈然としなかった、いま不満があるとしても「後々面倒」だから「劇的な変化をするぐらいなら我慢」するという極度の消極さの理由も、おそらくこの点に起因するのだろう。彼女は多くの場合、内心では不全能におおわれているとしても、周囲に認識可能な範囲では、おおむね欠如分を満たされて過ごしている。欠如分を満たしてくれる親からの自立は、今後は欠如分が満たされなくなってしまう可能性を孕んでいる。欠如分があいまいな現状のなかで、そのような自立をあえてする必要はどこにもないのである。

以上のことからすると、前田さんには努力する動機づけも希望も方法も奪われてしまっている、といえる。彼女が、強烈に欠如分を感じるのが過去のできごとに限定される、ということもまさにこの典型例である。というのも、既に過ぎ去った過去は、彼女にとっても親にとっても、「もはや取り返しのつかない (irréversible)」(p.577)ものだからである。たとえ過去において誰かの非があっても、その非を埋めるべく努力する必要は、親にも前田さんにもない。だからこそ前田さんは、安心して欠如分を実感し、また親に訴えることができる。ただしそれは、回復されない。回復されないからこそ、彼女のものではない世界における

彼女の現在は変化しないと保証されることによって、過去をいわば安心して訴えることができるにもかかわらず、同時に、回復されない欠如分を抱えて、前田さんは、いつまでも途方に暮れるしかないのではないだろうか。

5 おわりに

本稿では、前田さんへのインタビューをもとに、一見順当に見え、また当人も明確な問題意識をもっていないにもかかわらず、自らキャリアを形成することが難しく、漠然とした不安に苛まれている事例をみてきた。するとそこには、受動的攻撃と呼ばれるものに近い、強い不満足感が潜んでいることが明らかになった。しかもその不満足感は、一方で具体的なレベルでは現実を満たされ続けるという仕方によって、彼女自身に明確に捉えることが難しいものになってしまっているのだった。その難しさは、世界を自分自身のものとすることができず、未来へと向かっていくことのできない、という意味での困難さであり、傍からみていて歯がゆいほどの前田さんの受動性は、そこに由来している、と考えられる。

養育環境がキャリア形成を難しくすることには、希望する未来への道が経済的な側面から閉ざされてしまう、といった問題だけではない。どのような未来を胸に抱きうるのか、という自己投企の向かい先までもが当人に捉えられなくなる時、問題はより一層深刻になる。というのも、経済的な側面からの進路の閉鎖は、経済的問題を乗り越えさえすれば、改善可能である、と少なくとも理論上は言えるからである。しかしながら、何らかの事情により、希望する未来さえ見えなくなれば、本人も周囲も、努力や支援のしようがなくなってしまう、キャリアを形成する術がなくなってしまうのである。

そして、前田さんの事例が示しているとおおり、希望する未来が見えなくなってしまう状況を生み出すのは、必ずしも経済的な不遇や児童虐待といった、一見してネガティブな養育環境だけでは

ない。子どものために配慮し保護的にふるまい続ける親もまた、子どものキャリア形成を難しくしてしまうことがあるのである。

注

- 1) ピエール・ブルデュー他 (1991)。
- 2) 例えば荻谷剛彦 (2001) などがある。
- 3) 例えば金子善彦 (2008) などがある。
- 4) 井上清子・山内俊雄 (2004) p.146。
- 5) 山形俊・日高三喜夫 (2008) p.73。
- 6) 同所。
- 7) 例えば横山茂生 (1992) などがある。
- 8) 例えば田村正晨 (1984) などがある。
- 9) 山下美実子・石晓玲・桂田恵美子 (2010)。
- 10) [] 内はインタビュアーである筆者の言葉、また〔 〕内は補足を表す。
- 11) 本項では、片田珠美 (2012) からの引用に関してのみ、そのページ数の記載でもって、本書からの引用であることを示す。
- 12) 本項では、Sartre (1943) からの引用に関してのみ、そのページ数の記載でもって、本書からの引用であることを示す。

引用文献

- 井上清子・山内俊雄 (2004) 「臨床経験 結婚後に発症した神経性無食欲症の入院治療の1例」『心身医学』 第44巻第2号, pp.141-147
- 金子善彦 (2008) 『くもりガラスの人間関係—子へ、親へ、そして自分へ、虐待の世代間連鎖』中央法規出版
- 荻谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社
- 片田珠美 (2012) 『なぜ、「怒る」のをやめられないのか「怒り恐怖症」と受動的攻撃』光文社
- ピエール・ブルデュー他 (1991) 『再生産—教育・社会・文化』藤原書店
- Sartre, J.P. (1943) *L'être et le néant — essai d'ontologie phénoménologique* Gallimard
- 田村正晨 (1984) 「非行—臨床心理学的考察 (その

1)』『埼玉医科大学進学課程紀要』第3号, pp. 23-32

山形俊・日高三喜夫 (2008) 「女子大学生の摂食障害傾向における強迫性と両親の養育態度の関連」『久留米大学心理学研究』7 卷, pp. 69-76

山下美実子・石晓玲・桂田恵美子 (2010) 「大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討」『臨床教育心理学研究』第 36 卷,

pp. 21-26

横山茂生 (1992) 「親の訴える高校生の適応障害」『川崎医療福祉学会誌』第 2 卷 2 号, pp.81-86

(付記: 本稿の執筆にあたっては、前田さんに長時間にわたるインタビューにお答えいただき、また、論文としてまとめることを快くご了解いただきました。ここに深くお礼申し上げます。)

A qualitative interview study based on Sartre's "for-Itself" theory

How family environment in childhood can cause difficulties in career development in a person's 20s

ENDO Noyuri

This paper analyzes an interview about family relationships and focuses on the influence that family environment in childhood has on career development. The interviewee, who is a female public employee in her 20s, narrates her feelings of vague anxiety in regard to the future, in spite of the apparently satisfactory development of her career so far.

There are many inconsistencies which can be found in the interview. For example, the interviewee talks about her desire to live on her own, but she also lists the reasons why she should not do so. She also claims that her parents have never done anything for her while admitting that there were frequent excesses in the way that they raised her. Should her inconsistent attitude in regard to her parents, and including her complaints against them, be regarded as an egoistic attitude?

The interviewee's apathetic attitude toward her overprotective parents can be explained to some extent by the psychiatric concept

of "passive aggression". According to this concept, she feels herself helpless because of overdependence on her parents. She can't express her anger because she dreads making her friends and family lose the positive impression that they have of her.

Her spiritless and indecisive, inconsistent, attitude can be further explained if it stems from Sartre's for-Itself theory. We as for-Itself act in order to compensate for our lack of being. However the interviewee's parents' excessive interference always compensates for her lack of being before she discovers for herself what it is that she lacks. The world becomes "my one world" when we overcome those things which are obstacles to the realization of our potential. The interviewee is lacking in experiences of this kind which would allow her to feel that the world is "her world" which she can change by herself. This is the reason why she can't choose any way except her attitude of passive aggression.